

教員養成課程における家庭科教育に関する研究（2）

— 小学校家庭科新教科書の検討 —

A Study of Paradigm and Curriculum for Home Economics Education in Teacher Training (Part 2)
— Consideration for The New Elementary School Textbooks of Home Economics Education —

今津屋 直 子*

Abstract

New elementary school textbooks based on “the National Curriculum Standard for Elementary School”, which was revised in H. 20(2008), are put to practical use in April H. 23(2011). Therefore the reflected areas of improvement must be investigated from the practical viewpoint of teachers.

Firstly, guidance-like contents were recognized in the introduction and the structures, so that pupils can reflect themselves, and can challenge their learning towards their future. Secondly, in these textbooks’ descriptions, there is a twist to enhance pupils’ interests by showing some contents related to other subjects. Lastly, other twists in descriptions are seen: systematization of learning contents between elementary schools & junior high schools; improvement of contents on education about family, household, and diet; as well as emphasis on a perspective towards fostering consumers who lead a life proactively. However, it is speculated that the effectiveness depends on the teaching method of each teacher.

For the above reasons, certain textbooks used in teacher training are to be examined compared with one another.

キーワード：家庭科教育、小学校家庭科教科書、学習指導要領

1. はじめに

新学習指導要領（平成20年改訂、以下、新指導要領）に基づく教科書が既に文部科学省の検定を経て、平成23年4月より全国の小学校で一斉に使用される。新しい教科書は、教育基本法や学校教育法の改正で示された教育の理念や目標を達成し、新指導要領に示された教育課程編成の一般方針や各教科の目標・内容等を反映し、教科用図書検定基準等をもとに作成されている。

教科書は、児童が共通して使用する主な教材として、学校だけではなく家庭での学習においても重要な役割を果たしている。内野らが、6年生の児童を対象に家庭科の学習活動等の実態や意識を捉えるためにおこなった調査でも、児童は実践的な学習を支持する傾向にある一方で、教科書中心の学習を支持しており、教科書の果たす役割は重要であり充実した教科書の必要性を指摘している（内野ほか 200）。

教員養成課程のある本学教育学部のカリキュラム

「家庭」「家庭科教育法」においても、新教科書を用いた授業をする予定である。それに先立ち、新教科書に、新指導要領がどのように反映されているのか、また、新教科書の構成や特色を読みとり「家庭」「家庭科教育法」の授業でどのように活用するののか等の準備が必要である。

そこで、本研究では、新指導要領の家庭科「内容」の改善点について、活用する側の視点にたつて、新教科書から読み取ることとした。新指導要領の「内容」の主な改善点とは、ガイダンス的な内容の設定、小学校と中学校の内容の体系化を図ること、家族・家庭に関する教育の充実、食生活に関する内容の充実、主体的に生きる消費者をはぐくむ視点の重視、言語を豊かにし知識及び技能を活用して生活の課題を解決する能力をはぐくむ視点の重視である（文部科学省 2008）。活用する側の視点にたつとは、改善点に加えて教科書として扱い易いかどうかの観点をもってということであり、本文だけではなく、表紙や図や資料なども含めて調べることにした。次年度

* Naoko IMAZUYA 教育学部教授（家庭）学術博士

の新教科書使用開始にあたって教科書の解説書が同時期に出版される。解説書には改善点等が詳しく説明されることになるだろう。しかし、教師など活用する側が、教科書を教材とした授業に主体的に取り組むためには、まず、解説に頼らないで中身を読み取っていくことが求められる。

さらに、新教科書より得た知見をもとに、「家庭」「家庭科教育法」の授業内容について検討した。

調査対象の家庭科教科書は、新教科書として検定済（開隆堂）のものを用い、改善点を比較するために現行の教科書（開隆堂）を用い、各々新教科書および旧教科書と表わした。

2. 表紙や目次にみる改善

新教科書は目次および本体を挟む前と後ろの表紙の裏（以下、裏表紙）に重要な役割をもたせている。前の裏表紙は見開きのページ一面を使って、誕生から、小学校への入学、そして家庭科を学ぶことを通して5年生、6年生から中学生へと成長していく子どもたちの姿が写真を用いて描かれている。5年生までの成長の様子は、入学式、理科の授業、給食の時間、おじいさんへの肩たたき、以上4枚の写真で示され、5年生になるまでの自分を振り返ることができる。5年生になって家庭科学習がスタートすると、家庭科授業の写真が並ぶ。調査や発表に向けてのグループ学習、お茶を入れる、サラダをつくる、裁縫による物づくり、手づくりエコバック、お世話になった人へ手づくりのプレゼント、夏と冬のカーテン、床拭き掃除、家族と一緒に買い物、みんなで

取り組む海岸のゴミ拾い、配膳、家族で囲む食卓、以上13枚の写真で示している。これらの写真は家庭科で学ぶ4つの内容を表しており、5年生から6年生、そして卒業まで、家庭科を通して成長する姿に学習者の児童が自分の成長を重ねてイメージさせる。また、仲間や家族とともにいる写真は、学びや暮らしには仲間や家族との関係のなかに自分が存在していることを伝えている。さらに、同じページには、3つの空欄の枠が設けてあり、各々の箇所に2年間ですることができるようになりたいこと、5年生ですることができるようになったこと、6年生ですることができるようになったことを書くよう指示されている。

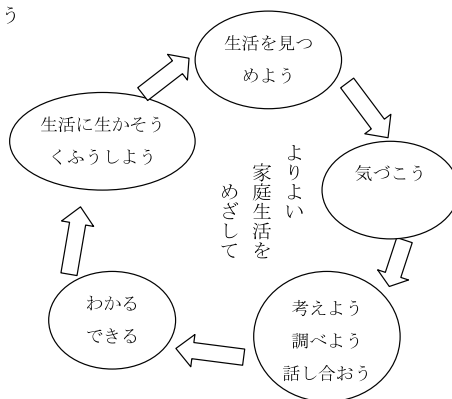
後ろの裏表紙には、「成長したわたしたち」という見出しがある。ここでは、2年間の学習を振り返り、できるようになったことを振り返るようになっている。

裏表紙を旧教科書と比較してみた。旧教科書では、前の裏表紙には目次が、後裏表紙には食品の分類図が示されている。先述したように新教科書では裏表紙に振り返りとこれからの自分を見つめるというねらいをもたせたところから、指導要領の改善点であるガイダンス的な効果や小学校・中学校の体系化が読みとれる。ガイダンス的な効果とは、これからの自分の成長への期待をもたせ、家庭科を学ぶ意味を考えさせることである。ただし、小学校・中学校の体系化については、中学生になったら、どのようなことができるようになるのか、イメージするのは難しく、この改善点が視覚的なものでは解決しないことがわかる。

—2年間で学ぶ家庭科—

1. 生活をみつめできることを増やしていこう

- 1-1A 見つめてみよう わたしと家族の生活
- 1-2B はじめてみよう クッキング
- 1-3C はじめてみよう ソーイング
- 1-4C かたづけよう 身の回り
- 1-5A できるようになったかな 家庭の仕事
チャレンジコーナ①
- 1-6C わくわくミシン
- 1-7B 元気な毎日と食べ物
チャレンジコーナ②
- 1-8D じょうずに使おう 物やお金
- 1-9C 寒い季節を快適に
- 1-10A 家族と ほっとタイム
チャレンジコーナ③



2. くふうして、生活に生かそう

- 2-1A くふうしよう 朝の生活
- 2-2C きれいにしよう クリーン大作戦
- 2-3C 暑い季節を快適に
チャレンジコーナ④
- 2-4C 生活を楽しくしよう ソーイング
- 2-5B くふうしよう 楽しい食事
チャレンジコーナ⑤
- 2-6A 考えよう これからの生活

*1 平成 22 年 2 月 22 日 文部科学省検定済

*2 新教科書から引用作成

図1 家庭科新教科書*1の目次からわかる教科内容*2

目次にも工夫がみられた。2年間で学ぶ家庭科の学習の流れを、視覚的にとらえるように示してある（図1）。新指導要領では家庭科の内容は旧指導要領の8つの内容から次の4つの内容に改められた。A 家庭生活と家族、B 日常の食事と調理の基礎、C 快適な衣服と住まい、D 身近な消費生活である。新教科書では2年間の学びの流れは、各々の内容をA～Dのグループごとに配列するのではなく、家庭生活を総合的に学ぶ流れのなかで同じ内容が続かないように配列されている。図1は新教科書の目次を参考に作成したものである。各題材の番号にはその内容がわかるように分類するための新指導要領に表記された記号A～Dを付けたが、実際には新教科書の目次に記号は付けられていない。この流れのなかでAは他のB、C、Dの学びを結びつける役割をもっている。新指導要領の解説には、内容の取り扱いとして、AからDの構成に当たっては、2学年間を見通して学期や学年の区切りなどの適切な時期に自分と家庭のつながりや成長した自分を確認できるように他の内容と関連させた題材を効果的に配列するようにする、とある。Aがガイダスの役割をもつことによって、B、C、Dの学習を通して成長する自分を喜び自覚することができ、児童の学習意欲を高めることが期待できる。旧指導要領の「家庭生活への関心を高める」というのは、新指導要領では「家庭生活を大切にす的心情をはぐくみ」に改められた。これは関心を高めるだけでなく、衣食住などの生活の営みが大切であることに気づかせるという働きかけが必要であり、新教科書のような目次の構成もその働きかけのひとつになっていると考えられる。

教科書の題材は指導要領の内容の構成に基づいて設定される。表1は教科書の題材について平成3年～22年版の目次に記された題材の一覧より作成したものである。入江の報告（1994）によると、平成元年改訂の指導要領に基づく教科書（平成3年）では、5年生は「わたしの生活を見つめて」「自分でつくるよろこび」「生活に生かすために」「元気で気持ちよく生活するために」、6年生は「家庭生活を計画的に」「よりよい生活のしかた」「ふれあいのある家庭生活」という大題材を設定し、各大題材のもとに各々段階的に衣・食・住・家庭生活および家族のような領域が包括されており、これは、それ以前の昭和33年改訂、昭和54年改訂、昭和60年改訂の指導要

領による教科書の題材構成と異なる点が指摘されている（入江 1994）。入江は、教科書の題材構成は基本的に中心的内容と特殊的内容によってなされており、各領域の題材は特殊的内容であり、それらを通して家庭科の学習目標である中心的内容の「よりよい家庭生活とは何か」に迫ると述べている。表2の平成3年版では、各大題材のもとに各領域が包括されることにより、大題材が学習者にとっては「よりよい家庭生活とは何か」を考えるヒントであり、「よりよい家庭生活」の要素であることを示唆している。

平成3年版のような構成は、指導要領（平成10年改訂）の内容構成が改められた後の教科書（平成16年版）にも引き継がれている。しかし、今回の新指導要領に基づく新教科書（平成22年度版）には変化がみられた。大題材が「生活を見つめできることをふやしていこう」「くふうして生活にいかそう」の2つに絞られている（図1、表1）。さらに教科書の目次には図2に示したように、「よりよい生活をめざして」は学ぶ目的を、その目的に向かう学習「生活を見つめよう、気づこう、考えよう、調べよう、話し合おう、わかる、できる、生活に生かそう、くふうしようという」を総合的な活動に捉え、示している。新教科書の構成は、教科書を教材として学習する側の視点にたったものであり、これによって家庭科の目標は実現可能な方向へ導かれることが期待できる。

3. 新教科書に使われているマークにみる改善

新教科書に使われているマークは、見出しや小見出しで整理された本文に加えて、学習者の注意を引くような目印をつけて簡潔な文言で示している。学習者へのことばかけとしての働きがある。新教科書に登場するマークの種類とその使用数を表2に示した。

旧教科書に使われているマークに加えて、新教科書では「学習したね」「食育」「ポイント」「ひと口メモ」の4つが新たに加えられた。

「学習したね」では、他教科での学習と関連する内容を示している。「学習したね」は2-3暑い季節を快適ににおいて4回、1-9寒い季節を快適ににおいて3回、1-7の元気な毎日と食べ物において2回、1-2はじめてみようクッキングにおいて2回登場して

表1 教科書の題材の変遷

平成3年版 (平成元年改訂指導要領)	平成16年版 (平成10年改訂指導要領)	平成22年版 (平成20年改訂指導要領)
5年生		
1 わたしの生活を見つめて 1) 協力して楽しく生活しよう 2) 衣服は自分で整えよう 3) なぜ、食べるのか考えよう	1 身の回りをみつめてみよう 1) どのような生活をしているかな 2) わたしにできることをやってみよう (かんたんな調理、身の回りの整理整、針と糸)	1 生活を見つめできることを増やしていこう 1) 見つめてみよう わたしと家族の生活 2) はじめてみようクッキング 3) はじめてみようソーイング 4) かたづけよう身の回り 5) できるようになったかな 家庭の仕事 6) わくわくミシン 7) 元気な毎日と食べ物 8) じょうずに使おう 物やお金 9) 寒い季節を快適に 10) 家族と ほっとタイム
2 自分でつくる喜び 1) 野菜サラダを作ろう 2) 楽しい小物を作ろう	2 作ってみよう、調べてみよう 1) 布で作ってみよう 2) 作っておいしく食べよう	
3 生活に生かすために 1) ミシンぬいをしてみよう 2) 便利なふくろをつくろう 3) いろいろなたまご料理をつくろう	3 くふうしてみよう 1) 身の回りを気持ちよくしよう 2) 快適な住まい方を考えよう 3) 家族とのふれあいを楽しもう	
4 元気で気持ちよく生活するために 1) 健康を考えた食事をしよう 2) 身の回りを整えよう		
6年生	4 計画的に生活しよう 1) 生活を見直そう 朝の生活を見よう、生活時間をくふうしよう、朝食に合うおかずをつくろう 2) 衣服を整えよう 3) 金銭や物の使い方を考えよう	2 くふうして、生活に生かそう 1) くふうしよう 朝の生活 2) きれいにしよう クリーン大作戦 3) 暑い季節を快適に 4) 生活を楽しくしよう 5) くふうしよう 楽しい食事 6) 考えようこれからの生活
1 家庭生活を計画的に 1) 生活時間や買い物のくふうをしよう 2) 計画的に製作しよう 3) 計画的な食事作りをしよう		
2 よりよい生活のしかたをめざして 1) 衣服の手入れや選び方をくふうしよう 2) 調理のくふうをしよう 3) 住まい方のくふうをしよう	5 生活に生かそう 1) 生活を楽しくする物を作ろう 2) 楽しい食事をくふうしよう	
3 ふれあいのある家庭生活 1) 心のつながりを深めよう 2) 楽しい会食をしよう	6 よりよい生活をめざそう 地域とのつながりをひろげよう	

いる。2-3および1-9の共通した内容は、季節の変化に合せた快適な住まい方である。1-9では「太陽と地面のようす (理科3年)」「国土の地形や気候 (社会5年)」「寒い地域の人々の生活 (社会5年)」、2-3では「太陽と地面のようす」に加えて、「葉の蒸散作用 (理科6年)」「空気や水の性質 (理科4年)」「ものとのけ方 (理科5年)」である。1-2では「温度による水の変化 (理科4年)」「量と測定 (算数3年)」である。1-7では「食料生産 (5年社会)」「植物の発芽・成長 (5年理科)」のほか、2-2で「ごみの処理 (社会3-4年)」がある。マークはついていないが、このほかにも他教科との関連のある内容はみられる。家庭科という教科が、他教科で学んだ事象や理

論を生活のなかに見いだす教科であるということがよくわかる。

旧教科書には「学習したね」のマークはない。児童が他教科で習ったことを思い出すには教師による直接的な働きかけが必要であった。このマークを用いることで児童が自ら他教科で習ったこととの関連に気がつくことが期待できる。

「食育」のマークの数は表2の括弧内の数字で示した。「食育」のマークは内容Bの食生活関連のページ番号の囲みに使われており、他のマークとは異なる使い方だったので、表2の合計数は食育マークを含まない数と括弧内の食育マークを含む数で示した。食生活だから食育という曖昧な提示の仕方に

何の意味があるかわからないが、学習者への働きかけとしては小さいと思える。

「ポイント」は衣生活で1回使われたほかは食生活関連の実習であった。「ポイント」で扱われている内容は、コンロの使い方や繰り返し登場するものもあり、教科書以外の教材例えば教室の掲示物にも活用するとさらに効果的だと考える。

「ひと口メモ」はマークの中でも最も数が多かった。内容Bの食生活が最も多く、次に衣生活や住生活が多かった。このマークは記載位置が片隅の方で目立たない存在である。補足的な要素が強いので、教師の方も必ずしも授業中に取り上げたりすることがないかもしれない。教科書は、記述すべてを教えるのではなく、発展的な学習等、児童の理解の程度に応じて学習するように工夫されている。学習

者にとっては、自らみつけて読んだり、教科書のつづやきのようにも聴こえたり、教科書のなかでも緩衝剂的な役割になると考えられる。

マークは児童の学習を助ける役割があるが、数が多すぎると本文への集中させる妨げになるかもしれない。1-2は初めての調理実習のため注意事項（安全、ポイント）をはじめ、伝えたいことがたくさんあるのだろうが、視覚的には多すぎてかえって見逃してしまう。教師はこの点に注意して、児童が着実にポイントや安全事項を押さえられるような授業の組み立てが求められる。

4. 本文（内容）にみる改善

A. 家庭生活と家族

1-1の『見つめてみよう、わたしと家族』の生活

表2 新教科書*1「マーク」にみる学習方法の特徴

目次番号	領域	頁数	学習したね	食育*2	ポイント	ひと口メモ	安全	環境	消費	参考	学習を深める課題	発展	小計
1-1	A	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1-2	B	10	2	(10)	5	5	4	3	3	3	0	0	25(10)
1-3	C	7	0	0	1	3	2	0	0	3	0	0	9
1-4	C	3	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
1-5	A	3	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
1-6	C	8	0	0	0	4	3	0	0	2	0	0	9
1-7	B	8	1	(8)	1	5	1	0	0	1	2	1	12(8)
1-8	D	4	0	0	0	0	0	0	1	1	4	0	6
1-9	C	6	3	0	0	1	1	1	0	1	3	1	11
1-10	A	2	0	0	0	1	0	1	1	2	0	0	5
2-1	A	8	0	(5)	2	2	1	2	2	0	2	0	11(5)
2-2	C	6	1	0	0	3	1	2	0	2	0	0	8
2-3	C	8	4	0	0	3	1	4	1	4	0	0	17
2-4	C	8	0	0	0	1	0	0	0	4	1	0	6
2-5	B	7	0	(7)	0	2	0	0	0	0	0	1	3(7)
2-6	A	4	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2
チャレンジ1*3		1	0	(2)	0	0	0	1	0	0	0	0	1(2)
チャレンジ2		2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
チャレンジ3		2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
チャレンジ4		1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2
チャレンジ5		1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計			11	(32)	9	30	14	17	9	25	12	5	132(164)

* 1：平成22年2月22日文科科学省検定済

* 2：食育のみ項目にマークしているのではなく食生活の内容を示すページのページ番号に本マークを付けているだけで数を括弧で囲んだ

* 3：チャレンジ1～5はチャレンジコーナーのこと

の学習のめあては「1日の生活を振り返り、家族とどのように関わっているか見つめてみよう」である。ここでは、文字による説明よりもイラストがたくさん使われている。イラストから想像できる自分自身の生活を振り返らせるのがねらいである。イラストのモデルになっているのは学習者自身と父母と妹と祖父母の6人家族であり、家族との暮らしの中に学習者自身が存在している様子が描かれている。学習者には多様な家族や家庭生活の姿があると想定されるので、イラストに描かれている題材によって児童の想像力が阻害されないような働きかけが教師には必要である。教師は必ずしも、これらのイラストを頼る必要はなく、児童自身の生活を写した写真やあるいは題材にした絵を持参させて、そこから様々な場面を思い起こさせることもできる。1-1は2年間の家庭科学の導入でもあるから、家庭生活にはどんな要素があるのか、何のために家庭科を学ぶのか、学習者に生活者としての視点をもたせ、学ぶ目的を考えさせる工夫が教材にも、教材の用い方にも必要である。

1-5の『できるようになったかな 家庭の仕事』の学習のめあては「家庭にはどんな仕事があるか調べ自分にできる仕事を増やそう、家庭の仕事の中で物を大切にしてくふうを見つけ、続けて実せんしよう」である。家族の一員として自分にできる仕事をみつけ、さらに、その仕事を実践する際には、どうしたらもっと家族に協力できるかを考え、工夫できることはないか家族と話し合ったりすることも大切とある。家庭の仕事のいろいろというイラストでは、裁縫(繕い物)衣服の整理、アイロンがけ、洗濯、買い物、料理、食器洗い、配膳、肩たたき、ベットの世話、植物への水やり、看病、風呂掃除、掃除機かけ、窓ふき、布団あげ、ゴミの分別といった、現代の生活状況をあらわす家庭の仕事である。ここでも学習者自身の生活から家庭の仕事を見つけるための課題を出すなどして、より実生活に基づいた教材作りをし、課題に気づかせて、よりよい生活への工夫をうながすことができると考える。

1-10の『家族とほっとタイム』では、家族との関係を深める機会としてのふれ合いや団らんを取り上げ、お茶の入れ方やお菓子の作り方を示している。お茶の入れ方については、旧教科書(平成16年版)では自分ができる仕事を増やすという場面のみで取り上げられていた。今回のようにお茶を家族のつな

がりを深める手段に見立てた内容構成は、実践にもつながりやすく、ひとつひとつの教材が弾力的に組み立てられた良い例である。1-10の題材を取りあげる時期は年間計画では5年生の終わりにあたるとあるから、学習者自身もほっと一息ついて、お茶を仲間と楽しみながら1年間を振り返り、学習の手応えを感じることができるのではないだろうか。

2-1の『くふうしよう 朝の生活』は、旧教科書と同様に、生活時間や朝食の見直しというねらいが含まれている。これは学習者が生活者であるという視点にたち、内容を弾力的に組み合わせた題材設定である。生活時間を見直すにあたっては、旧教科書にも、家族のことを考えていっしょに食事をしたり話し合ったり家庭の仕事をしたりする時間を増やす工夫をし触れ合いを深めよう、とある。しかし、新教科書では、家族と共に過ごす時間をつくらうという項目を設けており、ここでも家族の一員である自分の姿を生活時間のなかからも見出させようとしている。

2-6の『考えようこれからの生活』では、これまで生活をよりよくするについて学んできたが、ここでは環境のことを考えたよりよい生活とは何かを考えさせようとしている。また、家族のためや下級生のためにパーティや贈り物を用意して、感謝の気持ちを伝えることを勧めている。

以上のように、新教科書は、5つの題材に一貫して、家族の一員として自分が存在していることを気づかせ、家族の一員としての視点にたった学習を展開するような働きかけがみられた。また、題材の内容として学習者の視点に立って衣食住等を弾力的に組み合わせることにより、学習内容が児童の生活実態に近くなり、生活者としての自分に気がつかせるような働きかけがあった。目次からもわかるように、各題材の組み合わせによる学びの流れだけではなく、本文の内容からもAには家庭科の内容を総合的に考えるガイダンス的な役割を果たしていることが分かった。したがって、指導要領の改善点である「家族・家庭に関する教育の充実」については、図られていると推察した。

B. 日常の食事と調理の基礎

1-2の『はじめてみようクッキング』では、調理の基礎を学ぶにあたって、コンロの使い方から、調理操作の種類、それに準じた調理器具、調理の手順、

簡単な基本調理として湯をわかす・卵をゆでる・青菜をゆでる・ゆで野菜のサラダがあり、調理の後片付け(環境に配慮した)まで、学習内容は多数に及ぶ。いずれも調理の初心者が知っておく必要のあるものばかりである。学習内容に加えて、1-2では用いられている安全、参考、ポイントなどのマークの数が最も多く(表2)、合計25個であった。調理実習には火や包丁を使う為に危険も多く、食べものを扱うので衛生的な注意も必要である。ゆえにマークが示す事項も多くなるのだが、学習者の注意が散漫にならないようにする必要がある。何から教えていくのか、どこに時間を多く配分するのか、授業計画時には、調理に慣れないあるいは調理は初めてという学習者が調理を負担に感じたり、調理への興味を減じたりしないような配慮が必要である。

1-7の『元気な毎日と食べもの』では、栄養とは何か、栄養素とは何か、栄養のバランスを考えた食事とはどんな食事なのかについて学ぶ。栄養素については、今回の改訂で、中学校で扱っていた五大栄養素を小学校で扱うことになった。学習者自身の食生活を振り返り、日常生活で食べている食品を食品の身体における働きから分類させ、その働きは食品に含まれるどんな成分によるものかに注目させる。あくまで食事や食品と身体の健康との関係をつなぐようにし、栄養素を食べているという認識をもたせないようにしている。ごはんと味噌汁の調理実習からは、栄養的な特徴を理解し、炊飯を科学的な観点から理解するために、米と炊飯後のご飯の体積を比較している。調理が理科や算数の知識を活用できるものであることが実感できるように「学習したね」のマークを活用する。

2-5の『くふうしよう楽しい食事』では栄養バランスの良い一食分の食事を考えること、調理の計画をたてて簡単なおかずをつくることを目的としている。ここでは1-7で学んだバランスの良い食事をもう一度考えさせ、繰り返し学習させることで着実に身につくように設けた題材であることがわかる。1-7で学んだ献立に使われた食品を3つの食品のグループに分類した表を再び登場させ、食品のからだにおける働きを復習させる工夫がみられる。さらに、組み合わせについての考え方を示し、その練習になるよう色々なおかずを使用材料とともに示し、前出の献立表を使って練習できるようにしている。

このほか、食事の働きには、体をつくるほかに、

家族や身近な人との楽しく食事が触れ合いを深めることから、心をなごませる働きもあることを示している。このことは、先述の1-10『家族とほっとタイム』で食べものとお茶が家族の触れ合いを深めることを示唆するのに止まっていたが、本題材では食事の機能へと発展させていることにも注目したい。栄養のバランスがとれた食事については、2-1『くふうしよう 朝の生活』でも、前出のご飯と味噌汁、パンと飲み物の各セットに合わせる食べものを考えた朝食づくりを取り上げている。栄養バランスを考えた献立が繰り返し登場することによって、着実に身につくように構成している。したがって、教師にはこの繰り返し学習の効果があらわれるような授業の展開が求められる。

「日常の食事と調理の基礎」内容は、日常の食事と調理の学習を通して、日常の食事への関心を高め、食事の大切さに気付くとともに、調和のよい食事と調理に関する基礎的・基本的な知識および技能を身に付け、食生活をよりよくしようと工夫する能力と実践的な態度を育てることをねらいとしている。1-2、1-7および2-5の3つの題材に加え、「家庭生活と家族」でも日常の食事と調理をとりあげることによって、学習者が日常生活の中で主体的に活用できるようにした意図がよみとれる。

新指導要領では、食に関する指導については、家庭科の特質に応じて、食育の充実に資するよう配慮することが、内容の取り扱いに示されている。さらに、学校においては、家庭科などの食に関する指導を中核として学校の教育活動全体で一貫した取組を推進することが大切であると解説に示されている。入江らは、家庭科教科書に食育がどのように説明されているのかを明らかにするため、小学校家庭科教科書および中学校技術・家庭教科書を対象に食育に関する記述について調査した(入江ほか 2009)。その調査では、内閣府が2007年に実施した「食に関する意識調査」の15個の調査項目にしたがって、食育に関する記述の有無を調べている。その結果、記述があったのは、食にまつわる文化や伝統、栄養バランスの重要性、食を通じたコミュニケーション、朝食など規則正しい食生活、食事に関する礼儀作法、普段の料理の実践、自分の地域の郷土料理や伝統食の以上7項目であった。入江らの調査対象になった教科書は、食育基本法が施行される以前の旧指導要領によるものである。新教科書は、食育基本法を踏

まえた新指導要領に基づいているので、食育の充実を図ったものでなければならない。新教科書の新たな試みとして次の点に注目した。米についての記述箇所に「学習したね」のマークを付け、社会科で学ぶ食料の生産とのつながりに気付かせようとした点である。旧教科書では、米は日本のおもな農産物でわたしたちの食事と切り離すことの出来ない食品である、にとどまっていた。しかし、新教科書では社会科につなげることで、食料生産が国民の生活を支えていること、食料の中には外国から輸入しているものがあることがわかってくる（文部科学省2008）。行事食については、旧教科書に引続き、発展的な学習内容に雑煮を登場させているが、地域に伝わる雑煮を調べようという記述は、行事食というより伝統の味としての扱いになっている。雑煮は行事食でもあり、その意味を社会科で学ぶ年中行事とあわせて考えるなど、教師側の働きかけが求められる。食育に関しては、先述したように家庭科を中核として学校教育全体で取り組むことになっているが、教科書の記載からは学習者に家庭科が中核の教科であることは伝わらない。

C. 快適な衣服と住まい

1-3『はじめてみようソーイング』では、簡単な手縫いやボタン付け、1-6『わくわくミシン』ではミシンを使って直線縫いを学ぶ。手縫いでは、玉結び、玉どめなど簡単な操作ではあるが、裁縫においてはこれら操作のひとつひとつが仕上がりに影響し、視覚的にも目立ち、仕上がりにへの満足度を高めるためには、各操作の出来具合をよくする工夫が必要である。新教科書では「できたかな？」の項目を設けて、各操作の出来具合をチェックするようになっており、そこからは指導要領に示された「技能を着実に身につける」というねらいがみえる。

縫う操作を教科書で示す場合、立体的な動きを限られた数の平面図に表さなければならない。そこに読み取る側の想像力の差があらわれてしまう。新教科書は、玉結び、玉どめを示す写真を旧教科書の4枚から5枚に増やし、写真のサイズも大きくして、さらに手指の動きがわかるように焦点を指先だけから少し範囲を広げている。写真に加えて、授業ではデモンストレーションが効果的な教授法だが、個人差を考えると大人数の授業ではその効果をあげるのは難しい。その点、ビデオなどは繰り返し鑑賞でき

るので副教材として効果的と考える。

2-4『生活を楽しみましょうソーイング』のねらいは、布を使って生活に役立つものを考え、計画を立ててつくってみるところにある。1-3や1-6で学んだことを活用した取り組みになっている。先の学習から時間が経過している場合、せっかく出来るようになった裁縫技術を忘れていたことが想像できる。復習には教科書のページをめくって参考にすればいいのだが、技術を思い出すには再び教師の援助が必要となるであろう。1-6のミシン学習の最後に次にどんな物をつくりたいかをイメージさせて次の制作につながるような展開が必要だと考える。また、ガイダンス的な立場にある、A内容の家庭生活・家族の各題材では裁縫を取り上げていない。これは裁縫技術を忘れる原因をつくるかもしれない。日常生活の中で裁縫にも興味をもち、繰り返し取り組めるようにしないと、技術を技能につなげていくことは出来ないと考える。

1-4『かたづけよう身の回り』では、身の回りを見つめ工夫して整理整頓ができるようになる、2-2『きれいにしようクリーン大作戦』では、汚れや場所にあった掃除の仕方を工夫し、気持ちよく生活できるようにしようというねらいがある。新教科書では、前者は家庭における身の回りへの関心をもたせ、活動としては整理整頓に止めている。後者では主に学校の掃除を取り上げ、掃除の仕方を丁寧に解説している。もし、新教科書の目次にしたがって授業を計画するならば、掃除について学習するのは6年生になってからである。早い時期に家庭科で掃除について学んでおけば、毎日の掃除でもその効果的な方法等に意識して取り組むことになる。学校の掃除時間は、家庭科教育にとっては生活技術が向上する絶好の機会である。また、公共の場をきれいにすることは社会性をもたせることにもつながる。身の回りの環境としては家庭も学校も変りはなく、家庭だけではなく学校も自分の生活の場として認識した方がよい。そこで、計画案として、5年次の1-4の題材を扱う際に、2-2の「身の回りのよごれを調べてみよう」、「そうじをきれいにしよう」まで取り入れることを提案したい。ここでは学校のよごれウオッチングという実践も取り入れられるから、掃除の時間と関連させても学ぶことができると思われる。

新指導要領の解説によると快適な住まい方の指導

について、季節の変化に合せた生活の大切さがわかり快適な住まい方を工夫できること、とある。新教科書では、1-9『寒い季節を快適に』と2-3『暑い季節を快適に』で、各々、寒い季節を暖かく過ごすため、あるいは、暑い季節を快適に過ごすための住まい方や着方の工夫を学ぶ。住まい方では、前者が採光、照明、暖房器具、後者が風通しや室内の温度と湿度、冷房器具を取り上げ、着方では暑さ寒さに適した着方に加えて、前者では衣服の役割、後者では衣服のよごれと洗濯について取り扱っている。各題材には共通のイラストを配置して、寒さと暑さに対応した異なる点が見られるような工夫がみられ、両題材が一連の学びであることを思わせる。

1-9および2-3の題材は時間的に間をあけて配列するのではなく、同時期に寒さと暑さを比較しながら展開してもよい。あるいは、実習を取り入れるのであれば、季節を利用し、寒い時期と暑い時期と各々設定してもよい。新教科書の構成は後者である。2010年夏のように猛暑が続くと、5年生の夏休み前に2-3『暑い季節を快適に』を先に配列するようなことも考えられる。C内容に関しては自然環境や住宅環境に配慮し、題材を柔軟かつ弾力的に配列する方が、学習者の生活力の向上につながるであろう。

また、1-9および2-3の題材には、「学習したね」のマークが他の題材に比べて多く登場する。理科や社会の学びは、家庭科で学ぶ身近な事象を通して理解を深めることができる。これらの学習の機会を活用して、複数の教科が互いに学習効果につながるようにしたい。

衣服のよごれと洗濯については、洗濯の実習がある。実習で衣服の洗濯を取り上げるよりも、布の性質と汚れ、洗剤の関係などの実験の方が、よごれと洗濯について理解し易いと考え。ただし、その場合、実際の洗濯につながる工夫が必要である。

D. 身近な消費生活と環境

1-8『じょうずに使おう、物やお金』では、物やお金の使い方を知って工夫して買い物ができることを、学習のねらいにしている。消費生活については3・4学年の社会科（文部科学省 2008）において取り上げられているが、実生活を絡めた学びを展開しているのは家庭科である。各教科の特質を生かした取り組み方によって学習効果が高まると考えられる。ただし、ここには「学習したね」のマークはな

く、社会科との関連が現れていない。

近藤ら（2010）は小学生が消費のみでなく生産・販売の立場の理解をふまえた菓子の商品選択における価値認識の形成を目指した消費教育を目的として、実態調査をおこなっている。その結果をもとに、次のような消費者教育の授業実践の可能性を示唆した。授業内容に菓子を取り上げること、男女間に菓子の嗜好に差がみられたことより他者の異なる立場を理解しながら意思決定するためには授業方法にグループの話し合いを取り入れること、授業展開の工夫として児童自身で菓子に対して価値判断を設けること、以上である。このように、研究報告の結果を反映した教材は生きた教材として、学習者の興味を惹き付けるものとして期待できる。

「身近な消費生活と環境」の内容には、環境教育も含まれる。1-8の題材では、環境に関する学習は少ないが、物やお金の使い方を振り返り、ものを大切にしているか、あるいは、品物を買う際にむだな包装をしていないか、処理しやすい容器であるか買う前にほんとうに必要なものかなど、消費と関連させながら考えさせている。表1の環境マークが示すように、環境に関する学習は、他の題材の衣・食・住生活と関連して取り上げられている。繰り返し登場することによって、家庭生活を営む上で環境への配慮は欠かせないとわかるようになることが期待できる。

2年間の最後に設定されている2-6『考えよう これからの生活』についてはA家庭生活と家族のところで触れた。ここでは、家庭生活が環境と深く関わっていることを、2年間の学習のまとめとして考えさせている。

5. 教員養成課程の家庭科教育に関する検討

次に、先に述べた新教科書の内容をふまえて、教員養成課程の家庭科教育関連科目の授業計画を検討した。本学の場合、必修の家庭科教育関連科目は「家庭」および「家庭科教育法」である。「家庭」では家庭科の内容についての基礎を、実習を取り入れながら学ぶ。「家庭科教育法」では家庭科教育とは何か家庭科の特質から学習指導方法まで学ぶ。「家庭」は3年次の春学期、「家庭科教育法」は3年次の秋学期に開講される。

ここでは、「家庭」の15回の授業内容を以下のよ

表3 教員養成課程で用いられる教材の比較

X 小学校家庭科授業研究*1	Y 小学校家庭科教育研究*2	Z 小学校家庭科の指導*3
1章 家庭科の意義 28頁 戦後の教育改革、教育基本法と家庭科、学校教育法と家庭科、児童をとりまく家庭生活の実態、児童の心理的発達、児童の身体的発達、家庭科と家庭科教育、家庭科の独自性、他教科と家庭科、生涯学習の必要性、家庭科と家庭・学校・社会教育との関連	1章 家庭科教育の本質 24頁 戦前・戦後の家庭科教育、家庭科・家庭科教育の定義、学校教育における家庭科の位置づけ(教育基本法・学校教育法・学校教育法施行規則・他教科と家庭科)、児童の生活と家庭科教育(社会生活の変容・家庭生活の実態)、児童の発達と家庭科教育(知的発達・社会性の発達・発育と健康)	1章 家庭科とは 20頁 教育課程における家庭科、家庭科で育てたい人間像、家庭科で育成したい能力、家庭科で学ぶ内容、家庭科の学び方、家庭科担当者としての基本的資質、家庭科担当教師の専門性、学習者への理解
2章 家庭科の目標 11頁 目標の変遷、目標設定の視点、児童の心身の発達との関連、社会・家庭生活との関連、児童の欲求、他教科との関連、家庭科教育の歴史の変遷、諸外国の家庭科教育、学習指導要領改訂の趣旨・教科目標・学年目標	2章 家庭科教育の目標 8頁 目標設定の視点、目標の変遷、新学習指導要領の目標(教科の目標・学年の目標)	2章 家庭科のカリキュラム 22頁 カリキュラムとは、家庭科発展の歴史、学習指導要領改訂の仕組み、小学校と中学校の家庭科の教育課程体系化への課題、小中の連携からみた子どもにつけたい家庭科の能力、家庭科教育課程の編成原理
3章 家庭科の内容 12頁 内容の変遷、内容設定の視点、学習指導要領より内容構成・内容	3章 家庭科の内容 83頁 内容の変遷、内容設定の視点、学習指導要領の内容、教材研究(家族・家庭生活、食生活、衣生活、住居・住生活、消費生活・環境)指導内容の概要・基本的事項・教材材化指導における留意点	3章 家庭科の指導と評価 18頁 家庭科の学習指導の特徴、学習指導の工夫改善、家庭科における評価のあり方(評価の基本的な考え方、指導要録と評価の考え方、指導と評価の一体化)
4章 家庭科の教材研究 60頁 各領域(家族・家庭生活、食生活、衣生活、住居・住生活、消費生活・環境)に関する教育・内容研究と指導上の留意点・教材研究及び指導における留意点	4章 学習指導 23頁 考え方、指導の形態及び方法、実際(実習に関する例、環境を考慮した例、食生活を考えさせる例、男女共同参画を目指した学習指導例)	4章 家庭科の授業づくり 22頁 授業設定の視点、子どもの発達特質・課題、授業づくりのプロセス、年間指導計画の作成・指導案作成の手順・指導案の評価、授業評価・授業研究・授業改善
5章 家庭科の学習指導 20頁 学習指導の原理、学習指導の形態、学習指導法、家庭科の学習指導の特質、家庭科の必要性・種類と整備・設備品、学習指導計画の計画作成の意義・留意事項・基本事項	5章 指導計画 21頁 作成の必要性、作成にあたっての留意点(学習指導要領に明記された留意事項)、作成(準備・種類・題材の構成と配列・年間指導計画案・題材案・時案)	5章 家族と協力して主体的に生活を営もう 20頁 現状と課題、子どもにつけたい能力、授業づくり、学習指導のための基礎知識
6章 家庭科の評価 12頁 教育評価の目的、新学習指導要領で求められている学力、新学力観と評価、評価の基本的な考え方、授業における観点別評価の実施と指導要録、教科目標の分析と評価の観点、学習評価の方法の選択と活用、指導要録と通信簿	6章 施設・設備 8頁 家庭科室の必要性・現状、施設・設備の管理	6章 毎日の食事で心身ともに健康に 18頁 同上
7章 家庭科の授業づくり 19頁 家族・家庭生活、食生活、衣生活、住居・住生活、消費生活・環境	7章 評価 12頁 評価の意義、評価の種類、評価の方法	7章 自らの手で食事を整えよう 16頁 同上
	8章 家庭科担当教師 6頁 教師の資質、家庭科担当教師に求められる資質	8章 健康的かつ清潔な衣生活を 18頁 目指して 18頁 同上
	9章 諸外国の家庭科 11頁	9章 身の回りの空間を気持ちよく整えよう 20頁 同上
	10章 家庭科の課題 7頁	10章 布を用いて楽しく製作をしよう 10頁 同上
		11章 環境に配慮した消費生活 18頁 同上

* 1 : 池崎・増茂ほか (2009)

* 2 : 池崎・生野ほか (2009)

* 3 : 中間ほか (2010)

うに計画した。

第1回では小学校家庭科の理念、学習指導要領にみる家庭科の目標および内容、第2回の家庭生活と家族では「自分の成長と家族」「家族生活と仕事」、第3～6回の日常の食事と調理の基礎では、「食事の役割」「栄養を考えた食事」「調理の基礎」「身近な食品でおかずをつくろう」、快適な衣服と住まい

では第7～10回の「衣服の働きと日常着の快適な着方・洗濯」「手縫い(玉どめ、玉結び、ボタン付け)」「ミシン直線縫い」「製作のための裁断、アイロン」第11～12回の「整理整頓や清掃の仕方」「季節の変化に合わせた生活」第13～14回の身近な消費生活と環境では「物や金銭の使い方と買い物」「環境に配慮した生活の工夫」第15回にはまとめとして、家庭科

内容に関する課題を学習者自身の課題とともに整理し、協議する時間を設けたいと考えている。課題は、「家庭科教育法」へ繋げたいと考えている。

「家庭」「家庭科教育法」授業の教材として、小学校家庭科教科書および学習指導要領解説を用いるほかに、教員養成を対象にして作られた教材を用いる予定である。ここでは、表3に示した3つの教材を比較検討した。3つの教材は、新指導要領にそって作成されたものである。

初めに、家庭科とはどんな教科なのか学ぶために、3つの教材とも「家庭科の意義」、「家庭科教育の本質」、「家庭科とは」、を配列し、多くの頁を使って述べている。これらの題材では家庭科の特質を教師が理解するために、戦後の教育改革や家庭科教育の歴史や児童の生活実態や社会の変容と家庭科などが述べられており、1回の授業ではおさまらない分量の内容である。家庭科教育は、児童が生活の自立を目指し、家庭に軸足を置きながらも社会を見据えた視点をもった生活主体を形成し、個人の生活から他者との生活の共同を生きることをねらいとしている(今津屋2009)。つまり、家庭科は生活技術の習得だけを教科目標の中心としているのではないことを理解しなければ、真の家庭科教育につながらず、生活主体者の育成ができないのである。

このほか、3つの教材に共通しているのは、家庭科教育の目標、教科の内容、学習指導(指導計画、指導案)、評価方法であり、いずれも教員養成に必要な項目である。

各教材の特徴として、X書は、家庭科の内容(指導要領)、教材研究、授業づくりとわけて章立てしており、学習指導要領と共通の文言の使用が多い。

Y書は学習指導と指導計画を各々に章立てしており、詳しく解説している。また、施設、家庭科担当教師、諸外国の家庭科という章も設けている。一方、3章の家庭科の内容には基本的事項も一括に含めているのでとりわけ頁数が多い。X書との共通点も多いのは、編著者が同じというのもあるのであろう。

Z書は他の2つの教材と内容の構成に違いがみられる。他の2教材には家庭科教育の目標が述べられているが、Z書の目次にはみられない。代わりに、育てたい人間像、育成したい能力、の項目がある。また、第2章に家庭科のカリキュラムというのがあり、他の2書とは異なるアプローチをもたせた構成になっている。このほか、小中の連携化を詳しく示

し、教育課程の編成原理や指導と評価の一体化まで述べている。また、指導案や実践例の分量が多い。

以上、3つの教材には、教員養成で学ぶべき内容を押さえながら、各々特徴もみられた。

まとめ

新教科書には、児童が自分自身を振り返り、将来の自分をみつめて学習に臨めるように、ガイダンス的な内容の設定が、教科書の導入部や教科内容の構成にみられた。他教科の関連する内容を示すことによって、児童の探究心を高める工夫がみられた。小学校と中学校の内容の体系化、家族・家庭に関する教育の充実、食生活に関する内容の充実を重視した工夫がみられたが、その効果については教師の指導法にかなり依存することが推察された。

引用・参考文献

- 池崎喜美恵・増茂智子・新井映子・内野紀子・榊原典子・吉本敏子・仙波圭子(2009)『新版小学校 家庭科授業研究』池崎喜美恵編著, 教育出版社
- 池崎喜美恵・生野晴美・志村結美・流田直・鳴海多恵子・野上遊夏・浜島京子・増茂智子(2009)『新版小学校 家庭科授業研究』教師養成研究会家庭科教育学会編著, 学芸図書株式会社
- 今井美樹(2005) 小学校家庭科教育における指導法の分析—食物分野を中心として(第2報), 學苑, 779, pp 39-53
- 今津屋直子(2009) 教員養成課程における家庭科教育に関する研究(1), 関西学院大学教育学論究, 1, pp15-23
- 入江和夫(1994) 小学校家庭科教科書における教材の変遷について, 山口大学教育学部研究論叢, 44(3), pp. 207-216
- 入江和夫(2009) 食育に関する家庭科教科書の記述, 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 28, pp89-96
- 近藤精洋・滝山桂子(2010) 小学生の価値認識の形成をめざす消費者教育(第1報), 日本家庭科教育学会誌, 52(4), pp240-248
- 文部科学省(2008)『小学校学習指導要領解説 家庭編』, 東洋館出版社
- 文部科学省(2008)『小学校学習指導要領解説 社会編』, 東洋館出版社
- 中間美砂子・多々納道子・上里京子・表真美・河野典子・高木直・長澤由喜子・野中美津枝・福田典子・山本奈美(2010)『小学校家庭科の指導』, 建帛社
- 櫻井純子ほか(2004)『わたしたちの家庭科』, 開隆堂
- 櫻井純子・内野紀子・鳴海多恵子ほか(2010)『わたしたちの家庭科』, 開隆堂
- 内野紀子・櫻井純子・諏訪原洋子(2000) 小学校学習指導要領実施の評価(その1)—子どもの意識と態度形成, 日本家庭科教育学会誌, 43(3), pp159-166